

「使えるものは最後まで使い切りたい」と語るのは光洋ビニールの金沢辰男社長。口癖は「もったいない」で、フェルトペンが使用済みになればインキを補充してホディー部分を再利用するという。こうした儉約家精神が、現業のものづくりにも生かされている。

同社は塩化ビニル樹脂のリサイクル事業を展開する加工メーカー。1958年の創業以来、大阪の地で営業を続けている。本社近郊から回収した塩ビの端材を外部に委託してシート状に加工した後、ラミネート加

## 仕事人

### シート of 自在加工技術に誇り



光洋ビニール  
社長

金沢 辰男 氏

### 「もったいない」心に刻み

工したりエンボス模様をつけたりしてマット製品などを生産している。

ターを活用すれば柔軟に成形することも可能だ。

最大の特徴はシートを自在に加工できる技術力。ラミネートは最大5層で0.5〜5mmの厚さに対応し、エンボスにいたっては50種類以上の押し模様を揃える。打ち抜きやスリッ

回収した端材にはポリエチレン（PE）製のレジ袋などが混在することが多い。そういった異物を素手で取り除くのは金沢社長の仕事だ。「今では手のひらで塩ビとPEを素早く正確に判別できる」と胸を張る。

手作業で培った感覚が体に染みついていくという。

残念ながら、こうした熟練の技能が大阪から消えつつある。「不採算などが原因で後継者が現れず、近所の加工メーカーが次々に看板を下ろしていく」。先代が会得した技能が継承されないまま途切れることにも「もったいない」と嘆息する。

同業他社が廃業するなか、同社では長男の泰典専務と二男の聖悦部長が後を継ぐ予定。優遇な企業をよそ目に「今のものづくりに喜びと誇りを持っている」（金沢聖悦部長）。後継者となる二人は今、端材の判別作業に精を出している。